

芸術の統一理論に向けた「再帰的定義」の可能性

— C・L・ステューブソンのモデルから —

三浦俊彦

1 目的と方針

古い学説Aが新しい学説Bによって置き換えられるとき、主として四つのパターンがある。

- 1 Aの反例が指摘され、相容れない提案がBによってなされる。
- 2 Aで用いられる概念の曖昧さや論理形式の不備がBによって指摘される。
- 3 Aの前提がBによって否定される。
- 4 AがBによって一般化され、適用範囲を広げる。

パターン1の例としては、芸術の美的定義に対し提起された制度主義的定義が挙げられる。これは、学説の意味論的・経験的真理性に対する反論である。パターン2の例としては、ディッキーの制度主義的定義に用いられた諸概念（代表、授与、鑑賞など）への批判が挙げられる。学説の整合性、妥当性、経済性など形式面に着目した批判と言えるだろう。パターン3

の例としては、数々の本質主義的定義に対し、芸術はその概念の論理からして定義は不可能だと指摘したワイツの「開かれた概念」の議論が挙げられる。一群の諸学説を束ねる枠組みにかかわることが多いので、学説の有意味性への挑戦と言つてよい。心理的性質、制度的性質、美的性質などを物理的性質へ還元するタイプの議論は、その体系性の度合によってパターン2であったりパターン3であったりするだろう。

パターン4は、自然科学では普通であるにもかかわらず人文科学ではあまり見られない。ある学説の真理性、有用性などを肯定しつつ、その不完全性を補うことにより、より有用な一般的理論の創出を試みるものである。本稿では、芸術作品の解釈と評価について提起されたC・L・ステイブンスンのモデル(以下、Sモデル)を二つの点で一般化することにより、「芸術作品の解釈・評価」「芸術の定義」「芸術作品の存在論」という少なくとも三つの主題を方法的に統一する可能性を探る。Sモデルとは、芸術作品が性質Qを持つことを次のように分析するモデルである。

芸術作品xはQcである || det 芸術作品xは適切な仕方で(注意と美的没入の態度をもって観察したいと望む人々によってのみ洗練され維持されるべき仕方で)観察されたときQsにみえる (Stevenson, 1950, p.904)

これは循環定義ではない。被定義項Qがそのまま定義項に使われてはいないからである。Qc、Qsとともに“Q”と呼ばれるが、規範的要素を含む複雑な概念がQc、(クオリアのような)単純な非規範的概念がQsである⁽¹⁾。

“Q”には解釈的述語(統一されている)「寓意的である」などと評価的述語(「美しい」など)のいずれもが入りうる。記述的述語(「背景が赤い」「C音が持続する)「これこれの地名が使われている」など)については言うまでもない⁽²⁾。

まず記述的述語sによって記述的述語cが確認され、その確認法に従うような観察が「適切な仕方」とされる。この「適切な仕方」のもとで解釈的述語sによって評価的述語cが定義される。その同じ「適切な仕方」のもとで評価的述語sによつ

て評価的述語cが定義される。そういった多層的なプロセスにおいて、「記述」「解釈」「評価」を因果的に決定するが、その全体は、複数の「適切な仕方」から理由によって一つが選択されるに至る因果的プロセスと、選ばれた「適切な仕方」がQsの経験をもたらずに至る因果的プロセスという、二種類の因果関係に依存している。

Sモデルが独特なのは、上記の基礎づけ関係によっていったん「適切な観察の仕方」が決められたら、たとえば評価述語においても規範的な評価を非規範的な評価によって定義できるとする点である。芸術作品xが精妙cであるのは、xが適切な仕方で見られるとき精妙sにみえるということであり、精妙sにみえるというのは端的な事実であって、規範的事実ではない。規範的性格は「適切な仕方で」という句が肩代わりしているのである(3)。

ここで、Sモデルが潜在的に有していながら原論文で論及されなかった二つの可能性に注目し、それに応じた二種類の一般化を試みたい。

第一の一般化は、xの領域を芸術作品以外にも広げれば、記述、解釈、評価にかかわると通常考えられる述語以外の述語も、Qの一例と見なせるのではないかとということ。

第二の一般化は、Qc、Qsの二階層区分を無限の階層区分へと拡張して、諸性質の再帰的定義 recursive definition が定式化できるのではないかとということである。

2 方法／一般化その1 —— 論議領域の拡張

第一の可能性のうち、三つのバリエーションを提起しよう。

すぐに思いつくのは、xの領域を芸術作品以外にも拡張する可能性である。芸術作品以外のいかなるもの(物理的対象、抽象的対象、出来事など)についても、美的性質を帰属させうることに異論はないだろう。芸術学だけでなく環境美学その

他さまざまな応用美学の可能性を探り、自然美や機能美を広く論ずる枠組みを得るために、 x の領域を任意の集合へと拡張することができる。

さて、 x の領域を芸術作品以外へ拡張したならば、芸術と非芸術を分ける述語が意識され、第二の拡張へ移ることになる。とりわけ、芸術的記述・解釈・評価にかかわる述語を最も一般化したとき、すべての芸術作品に、かつ芸術作品にのみあてはまる述語が得られるだろう。その述語はもちろん、「芸術である」という述語である（「彫刻である」「演劇である」のような下位概念についても以下と並行的な議論が提示できるが、最も包括的な「芸術である」を考えれば十分であろう）。

記述的な意味での「芸術である」（分類的な「芸術」、解釈的な意味での「芸術である」、評価的な意味での「芸術である」）（尊称的な「芸術」、という区分は、ここでは重要ではない。どの意味であれ「芸術である」という最も一般的な芸術的述語が特定の対象に当てはまる根拠を正当化するのに、 S モデルが応用できるのではないかということだ。すなわち、「芸術である」を Q として、任意の x について S モデルを定式化するならば、ただちに「芸術の定義」「芸術の線引き問題」を論ずる枠組みが提供されるはずである。

以上の第二の拡張は、 S モデルの Q として外延の広い極限を考えるものだったが、逆に Q の外延を狭める形で S モデルの拡張を図ることもできる。通常の述語は複数の作品に当てはまるが、論理的にただ一つの作品にのみ当てはまる特殊な述語も Q の事例と認めるやり方だ。具体的には、『モナ・リザ』である『『マクベス』である』といった、作品の同一性を表わす述語である。任意の現われ x について、それが特定の芸術作品である根拠を S モデルによって定式化するならば、それがただちに「芸術作品の同一性基準（作品の存在論）」のモデルになると考えられるのである。

この第三の拡張については、芸術作品等のタイトルや通称を述語として捉えうる条件が言語哲学によって根拠づけられなければならない。その根拠づけは、「述語主義 predicationism」と呼ばれる狭義の固有名理論 (Burge, 1973) だけでなく、タイトルと固有名の関係についての諸研究にも基づくことになるが、それらの一般的言語観の正否とは独立に、論理的な展望

を探ることができるだろう。

Sモデルのこの三つの拡張のうち、第一の拡張はSモデルを芸術哲学から美学へと拡張するものであり、第二、第三の拡張は芸術哲学の中でSモデルの適用範囲を広げようとするものである。ここでは、芸術哲学に絞ってSモデルの適用可能性を探りたい。第二、第三の拡張を統一に行うことができれば（具体的には、その両者に当てはまる「適切な仕方」が定式化できれば）、「芸術作品の解釈・評価」「芸術の定義」「芸術の存在論」という三つの論題を統一的視野のもとに総合できるはずである。

3 方法／一般化その2 —— 構造の拡張・再帰的定義

「芸術の定義」という第二の拡張に本稿の論点を絞って、それを遂行する方針を探ろう。SモデルのQを「芸術である」とすると、次の定義が得られる。

xは芸術cである \parallel c.c. xは適切な仕方（注意と美的没入の態度をもって観察したいと望む人々によってのみ洗練・維持されるべき仕方）で観察されたとき芸術sにみえる

ここで芸術sは「現象的性質」とされている。「芸術sにみえる」ということが可能でなければならぬからだ⁽⁴⁾。しかしこれは、「芸術」という文化の究極の根拠づけが受容者の経験に求められるように思われるゆえの定式化にすぎない。「にみえる」を広義にとれば、概念的な感じをも含むことができ、非知覚的なコンセプチュアルアートの「芸術らしさの雰囲気」なども包摂することができる。雰囲気を「知覚的性質」として捉えなおすことすらできるかもしれない。

一般的に言えば、「xは芸術sにみえる」は「xは芸術である」という〈還元不可能な主観的感じ〉がする」という意味である⁽⁵⁾。

通常、問題となるのは「適切な仕方」の方である。そこには「美的没入の態度」という概念が用いられており、Sモデルは芸術の美的定義を前提しているように思われる。本稿の関心は、Sモデルの形式の一般化可能性にあるので、美的定義ではなく他の種類の定義が用いられていてもかまわない。そこで、「適切な仕方」の具体的内容が議論の大筋には影響しないように、Sモデルを次のように形式化しよう。

$$Qc\ x = \text{def. } F\ x \square \rightarrow A\ (Q\ s\ x) \quad (6)$$

「適切な仕方」の具体的な内容についての不一致、すなわち第1節で見た議論パターン1、2への対処は、上記定式化のFの部分の調整によって決着をつけなければならない⁽⁷⁾。

しかし、定義可能性そのものを否定するパターン3の批判に対してはどうか。たとえば、「開かれた概念の論理からして、必要十分条件での定義は不可能である」といった反本質主義は、Fそのものの同定が不可能であるとし、したがってQsも定めようがなく、Qcの定義もできないと主張する。換言すると、 \square が必然的に偽とされるので、AやQsに何を代入しようが右辺はトリビアルに真となり、右辺を必要十分条件とする左辺は必然的真理となってしまう。これはQcが定義できないということである。

ただし、反本質主義者は芸術作品の内在的性質だけを念頭に置いていた疑いがあるため、関係的性質を考慮することで芸術概念の開放性と本質主義とを両立させられるかもしれない。それがディッキーらの制度論的定義だった。Fの調整で済ませようとする戦略である。しかし、関係的性質における開放性までも指摘された場合、制度主義的な方針には限界が生じう

る。そこで芸術の定義可能性を探るSモデル拡張路線の道として、再帰的定義が有望視されるだろう。すなわち、定義項の内容ではなく階層を変えるやり方である。

c, s の二階層区分を無数の階層区分へと拡張した再帰的定義の一般形式はこう書ける。

$$Q_n x = \text{def. } F x \square \rightarrow A(Q_{n-1} x) \quad \dots \quad (1)$$

$n = 1$ とした基底の定義がSモデルに相当する。

Q0はQとして正当化されない所与としての「芸術っぽさ」という性質であり、そこでのQに規範的な正当化を与えるために「適切な仕方」によってQ1が得られ、さらに上位の規範によって正当化を与えるために「適切な仕方」によってQ2が得られ……という形で、構成的に定義が進み、正当化の層が積み重ねられてゆく。

再帰的定義の例としてよく持ち出されるのは、階乗関数の定義である。

$$n \cdot 1 = 1 \times 2 \times 3 \times \dots \times n \quad n > 0 \quad \text{のとき} \quad n \cdot 1 = (n-1) \cdot 1 \times n$$

$0 \cdot 1 = 1$ という値が基礎づけの「基底」となる。

関数表現を指示しやすく書きなおすと、階乗関数Kは

$$K n = \text{def. } L(K(n-1), n)$$

関数Kが関数Kで定義されているが、循環定義ではない。そして、 $K(K(n-1))$ よりも $K(K(n))$ の方が本当のKだというわけではなく、この定義式全体で関数Kの本質が定義されていると理解すべきである。同様に、(1)でnがいくつするとき本当のQが定義されたことになるか、という問いは意味をなさず、(1)全体でQが定義されると理解すべきである⁽⁸⁾。この定義は、「芸術である」だけでなくあらゆる芸術的述語に統一的に適用できるだろう。

4 適用

さて、パターン3における再帰的な議論の進み方は次のようになる。

レベル0 鑑賞

x はQ0である (赤い、統一されている、崇高である、芸術である、……)

Q0 x ↑ 本当か? (批評家)

Q0は本当にQの名に値するか?

レベル1 メタ鑑賞≡批評

適切な仕方で (心理的、社会的、物理的……) 観察されたとき、 x はQ0にみえる

Q1 x = def: $F x \square \rightarrow A (Q0 x)$

↑ 本当か? (美学者)

Q1は本当にQの名に値するか?

レベル2 メタ批評≡美学

適切な仕方で (心理的、社会的、物理的……) 観察されたとき、 x はQ1にみえる

Q2 x = def: $F x \square \rightarrow A (Q1 x)$

↑ 本当か? (反本質主義者)

Q2は本当にQの名に値するか?

レベル3 メタ美学

適切な仕方で (心理的、社会的、物理的……) 観察されたとき、 x はQ2にみえる

Q3 x = def: $F x \square \rightarrow A (Q2 x)$

↑ 本当か?

Q3は本当にQの名に値するか?

レベル4　メタメタ美学

適切な仕方（心理的、社会的、物理的……）観察されたとき、 x はQ3にみえる

$Q4x = \text{def. } Fx \square \rightarrow A(Q3x)$

↑ 本当か？

Q4は本当にQの名に値するか？

レベル2に対して、反本質主義者が「芸術」は開かれた概念だから必要十分条件で閉じることができない」とQ2を却下するとき（すなわちQ2を定義するFは不可能だとするとき）、その根拠となる「日常言語の「芸術」の用法」が暗黙に想定されている。その想定の間場からはQ2の見え方Aがレベル2よりどう変わるかを試す基準を明示化すると、レベル3のFとなる。日常言語の基準によりQ2からいっそう反省的な「芸術」の用法レベルへと移行し、そこでQ3が得られる。以下同様。

Qは、レベル3では、非規範的なQ2と規範的なQ3という2つに分かれて出現する。レベル3でのA(Q2x)は、「日常言語レベルの直感でxは芸術にみえる」という意味である。ワイツは「この流木は芸術である」という例を出していた(Waltz, 1956, p.34)。それは再帰的モデルでは「この流木は芸術2ではないが芸術3である」と解釈できる。そこでレベル4の考察Fによってレベル3を検証し、依然として流木が芸術にみえるかどうか問えば、手つかずの流木は比喩的に芸術であるにすぎない（芸術3であっても芸術4ではない）ことがわかるかもしれない。ワイツの日常言語的直感Aは、比喩を字義通りにとるといふ非日常的な（あるいは過度に日常的な？）規範的言語運用Fの因果的帰結に他ならなかったのである(9)。もちろん、自然界に転がったままの流木がより高いレベルで芸術に返り咲く可能性は否定できないが、それはワイツの語ったレベルの「芸術」を包摂する全体像の別レベルでの一断面をまた新たに示すにすぎない。

いかなる反本質主義も、「本質主義は間違っている」という判断を下すための語法を前提しており、それを暗黙の基準と

して使っている。再帰的定義は、反本質主義者が前提するレベルを対象化し、さらにその前提も対象化し、……と限りなき階層上昇の中で反・反本質主義的根拠づけを行なう試みなのである。

5 検証 — 求心的モデルと遠心的モデル

Sモデルは、もともと解釈や評価についてのモデルなので、芸術の定義に転用した場合はとりわけ美的定義と相性がよい。Aを鑑賞者の美的経験に限らずならかの効果一般と捉えれば、(1)は美的定義に限らず機能主義的定義を一般的に形式化できていると言えるだろう。しかし、再帰的定義と言ってまず思い起こされるのはむしろ、レヴィンソンの歴史主義的定義 (Levinson, 1979, p.19) など、手続き的定義の方ではなかっただろうか。

手続き的定義を述べている実際の文言に合わせた形式化を改めて行なってみて、再帰的定義の適用範囲を検証しよう。たとえばディッキーの初期の制度主義的定義はこうなる (Dicke, 1974, p.34)。

xは芸術cである \parallel def. xは人工物であり、その一群の諸側面ゆえに、芸術s界を代表して振る舞うある種の人々に鑑賞の候補という地位を授与された
簡略化して、

xは芸術cである \parallel def. xは〈芸術s界と適切な関係を持つ〉ものである

これは、制度に芸術性sを認定したあと、その芸術性sで作品の芸術性cを定義する定式化と考えられる。再帰的定義として一般化すると、

$Q_n x = \text{def. } \exists w (Q_{n-1} w \& F x w) \dots\dots (2)$

(2) が歴史主義的定義の枠組みも捉えていることは一目瞭然だろう。制度主義的定義と歴史主義的定義が論理構造を共有するという事実が、このモデルから明らかになる。ちなみに(2)は(1)のような傾向性による定義ではなく、顕在化した事実による定義であることに注意しよう⁽¹⁶⁾。

(2)は普通、「還元的な根拠づけ」として使われる。すなわち、 $\exists w$ が $\exists w$ によって正当化されるものとされる。この正当化の方向は、 $\exists w$ から $\exists w$ へと Q がいつそう客観的な妥当性をまとうようにしていった(1)の「構成的な正当化」モデルとは正反対だ。

還元的モデルでは、「 x は芸術0である」を正当化するのに「 x はある芸術1と適切な関係 F にある」という命題が検証され、その検証に使われた芸術1について「芸術1であること」を正当化するのに「ある芸術2と適切な関係 F にある」ことが検証され、その芸術2について「芸術2であること」を正当化するのに「ある芸術3と適切な関係 F にある」ことが検証され、……という具合に進んでいく。

こうして最終的に、還元不可能な $\exists w$ 、すなわち原芸術 $Ur-art$ (あるいは原制度)に行き着くことができれば、「 x は芸術0である」は基礎付けがなされたことになる⁽¹⁷⁾。

同じ再帰的定義でも、(1)は遠心的であり、定義項にある Q の方が先に所与として経験されている。対して(2)は求心的であり、被定義項にある Q の方が所与として流通しており、 Qs は歴史的還元あるいは社会的還元のすえ、発見される(あるいは規約される)のである。

ただし(2)のこの還元主義的求心性は、第1節パターン1、2の議論においてなされる正当化、すなわち理論的内容的洗練に対応したものだ。パターン3の議論においては、(2)に即した手続き主義も、(1)と同じく遠心的な構成を目指す

ことになる。なぜなら反本質主義者は、「基底の \bigcirc は本当に存在するのか?」「Fは因果の鎖を確保できるのか?」と定義の構成要素の適切さを問うてくるのではなく、「かりに途切れない連鎖によって「 \bigcirc 」にたどり着けたからといって、それが「xは芸術0である」の正当化になるのか?」といったメタレベルでの疑いを投げかけてくるのだからである。こうしたパターン3への対処としては、手続き主義も、構成的な遠心運動をたどらざるをえない。すなわち、「xは芸術0である」の正当化として、芸術0なる対象または制度が(2)の図式に従って新たな芸術1、芸術2、…:芸術nを生み出し、それから高次へと更新される視点ごとに、(2)を満たすもののみが必ず「芸術」と呼ばれるにふさわしい、と主張していくことになる。

このようにして、機能主義的定義(1)にせよ手続き的定義(2)にせよ、再帰的定義として一般化すると、反本質主義的批判に対する応対は同じ形になるだろう。すなわち、批判対象となる階層nでの定義を対象化した階層n+1において、同型の定義を繰り返すという応対だ。任意の階層での議論を高次の階層でたえず主題化することによって、定義を動的な活動の総体として捉えるのである。

これは、「開かれた概念」をワイツのように特権的語法の水平的な場で「決断問題」と対峙させるのではなく、垂直的な場で見通す芸術観と言えよう。Qが開かれているように見えるのは、異なるレベルのQの外延を比較するからにすぎず、定義の内包は実は再帰的に閉じている。したがって第3節末尾で述べたように、あるレベルでQが閉じたように見えたとき初めて本当の「芸術」が定義できる、といった特権的レベルは存在しなくてよい。

ただし、その特権的レベルに相当するものが認められることすらあるかもしれない。特定レベルを超えるといかなるレベルでもQの外延が一定である、という飽和状態あるいは平衡状態にいつか達するものとしよう。すなわち、

$$\exists k \forall n \forall x (Q_k x \equiv Q_{k+n} x)$$

が成り立つとしよう。このとき、理論的対象化に対して耐性を持つQ概念の外延が得られたことになり、それだけ堅固なQ

の定義が得られたことになる⁽¹²⁾。

それは芸術の定義にとって決して必要なことではない。しかしそうした強い定義は、論理的に可能ではあるだろう。概念のネットワークが自然現象であることは否定できないし (Quine, 1969)、「共有知識」や「相互信念」についての考察 (Schiffer, 1972 ほか) が示すように、一定階層を超えた命題では、認識的演算子の付加による真理値の差異は判別しがたくなるからだ⁽¹³⁾。ゆえに、一つのレベルの観点でQの外延が開かれ続けているように見えるからといって、レベル上昇の究極においてQの外延が平衡状態に達していないとは限らない。

結論として次のように言えるだろう。Sモデルの一つの拡張により得られる「芸術の再帰的定義」は、「芸術の定義」の定義を提案するメタ定義理論であり、本質主義的定義を探るための新たな枠組みとなりうるものである。

*本稿は、第六七回美学会全国大会(二〇一七年一〇月八日、同志社大学)での発表原稿「芸術の統一理論に向けた「再帰的定義」の可能性——C・L・ステイブンソンのモデルから——」に加筆したものである。

参考文献

- Beadsley, Monroe C. 1981, "Redefining Art" *The Aesthetic Point of View*, Ithaca, New York: Cornell University Press.
- Beadsley, Monroe C. 1983, "An Aesthetic Definition of Art" *What is Art?* ed. by Hugh Curtler, Haven
- Burge, T. 1973 "Reference and Proper Names" *Journal of Philosophy* 70 (14), pp.425-439
- Danto Arthur C. 1964 "The Artworld" *Journal of Philosophy* 61, (19), pp.571-584 西村清和訳「アートワールド」西村清和編・監訳『分析美学基本論文集』勁草書房、二〇一五年

Dickie, George 1974 *Art and the Aesthetic: An Institutional Analysis* (Cornell U. P.) 今井晋訳「芸術とはなにか制度的分析」西村清

和編・監訳『分析美学基本論文集』勁草書房、二〇一五年

Levinson, Jerrold 1979 “Defining art historically?” *Music, Art, and Metaphysics*, (Cornell U. P., 1990; 2nd edition, Oxford U. P., 2011) pp.3-19

Lewis, David 1973 *Counterfactuals*, (Harvard U. P.; revised pr. Blackwell 1986). 吉満昭宏訳『反事実的条件法』勁草書房、二〇〇七年

Quine, Willard V. 1969 “Epistemology Naturalized” *Ontological Relativity and Other Essays* (Columbia U. P., 1969) pp.69-90, 伊藤春樹訳「自然化された認識論」『現代思想特集クワイン』一九八八年八月号

Schiffer, Stephen R. 1972 *Meaning* (Clarendon)

Stevenson, C.L. 1950 “Interpretation and Evaluation in Aesthetics” M.Weitz ed., *Problems in Aesthetics* (Macmillan, 1970) pp.877-913.

Weitz, Morris. 1956 “The Role of Theory in Aesthetics,” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism* 15: pp.27-35.

註

- (1) スティープンソンはQsの本性については考察の範囲外だとして何も述べないと明言している (p.883)。
- (2) スティープンソンは記述的述語を解釈的述語・評価的述語とは別扱いにすることを示唆しているが (pp.887-8) 記述語も解釈度・評価度ゼロの極限ケースとして、統一的に扱った方が本稿の趣旨に合致する。
- (3) 評価そのものに内在する規範性の感じは傑作sにも共有されているが、Qcの規範性は、正当化を実際に得ている(あるいは少なくとも要請する)という意味での規範性である。
- (4) 芸術sが現象的性質を指示する場合は、Sモデルにおける「にみえる」という補足は不要で、「芸術sである」と言

えば十分かもしれない。ここではステイブンスンの定式に倣って、「にみえる」を補っておく。

- (5) 「還元不可能」とは言っても、「芸術らしさの感じ」は「芸術理論」に還元されるのではないか、と言われるかもしれない (Danio, 1964)。芸術理論はSモデルでは「適切な仕方」の中に組み込まれるので、「芸術s」は単純な主観的雰囲気限定して考えておこう。

- (6) 注4で述べたように、Qsが現象的性質を指示する場合は、Aという「見えの演算子」は不要かもしれない。あるいはQsはxではなくxの一表象(作品切片)に帰属させるべきかもしれない。ここでは「見え」に限定されない一般的な非規範化演算子として、Aを消去せずに残しておく。そして後に見る再帰的定義では、Aは不可欠となる。□↓は反事実条件文における条件演算子 (Lewis, 1973) で、「適切な仕方」とQsとの関係は論理関係ではなく因果関係であるというステイブンスンの見解を反映させている。

- (7) コンセプチュアルアートの「芸術らしさの感じ」を美的定義が包摂できているならば(注5参照)、すでに手続的定義を採用する動機は弱まっている(ただし実際の美的定義の提唱者は、Beadsley, 1981, 1983のように典型的なコンセプチュアルアートを芸術と認めない傾向がある)。また、「芸術という制度を他の制度といかにして区別するか」「芸術の地位を付与する歴史をたどると、どこへ行き着くのか」を突き詰めると、「美」の概念を避けることはできそうにない。たとえば、地球外文明のさまざまな制度の中から芸術制度を識別する場合、制度主義は役に立たないしたがって事実上、Sモデルの字義に従って、美的定義を主として念頭に置くのが本稿の立場ではある。

- (8) 再帰的でないもとのSモデルでは、Qcが本当のQ(定義されるべきQ)で、Qsは仮のQ(定義に使われるQ)だ、という絶対的区別は意味をなす。

- (9) 流木の例が示すように、任意のxにつきQxが真であるためにQローixが真である必要はなく、Qロトixが真である必要もない。つまり各レベルの同音異義述語の外延は互いに独立である。この論理的独立性は、非規範化の演

算子Aの作用による。

(10) (2)の形式は実際の制度主義的定義や歴史主義的定義の文言に合わせたゆえの形式であって、 $Q \times \square \downarrow$ といった（地位授与のための適切な条件）を付ければ、より一般的な形式が得られる。つまり(1)と(2)は、定項の解釈だけが異なる同型の傾向主義的定義として統一することができる。

(11) Ulatそのものの同定が、進化論的な美的顕示の本能によってしかなされないとすれば、歴史主義的定義は結局、美的定義に還元されることになる。

(12) 個々の作品ごとにあるレベル以上でQかどうかが一定する、という弱い表現の方がプロセスを正確に表わすかもしれない。すなわち、 $A \times E \times V \times R (Q \times X \equiv Q \times R \times X)$ これは平衡状態そのものを意味してはいないが、平衡状態を必然的に帰結する。なお、Qかどうか不確定のxがいくつ存在しようとも、不確定性が体系化（Q度が測れるなど）されていけば、平衡状態の成立には影響しない。「曖昧さ」は潜在的にすべての述語につきまとうseries問題を形成するので、芸術哲学に特有の考察からは除外してよい。

(13) つまり、次の命題は真である。 $\forall y \exists k (Q \times k \times y \square \rightarrow A (\forall n \forall x (Q \times k \times X \equiv Q \times k \times n \times X)))$